

あれこれ仏教用語

沢庵（たくあん）

漬物の大根漬けのことを、沢庵（たくあん）と言います。なぜ、沢庵と呼ぶのか、いろいろな説があります。

① 沢庵和尚が漬け始めたから
② 貯え（たくわえ）漬けが転化したもの

③ 沢庵和尚の墓の形が大根漬けの重石に似ていたから

④ 沢庵和尚の墓の形が大根漬けに似ていたから

この沢庵和尚というお坊さんは、江戸時代初期の臨済宗のお坊さんです。三十五歳で大徳寺の第一座となり、堺の南宗寺に住持。寛永六年に紫衣事件で幕府と抗争し、出羽に配流されるのちに許されて宮中でお経を

講義し、徳川家光の帰依を受けて、品川に東海寺を開きました。

また、宮本武蔵の師匠と伝えられています。



雑記抄 我が家の阿弥陀さま

今年も、お盆が終わりました。お盆の間、百三十七軒の檀信徒の皆様のお家に、棚経のお参りをさせていただきました。

一軒一軒、お仏壇の前で読経し、おまつりしてある阿弥陀さまのお顔を拝むと、阿弥陀さまのお顔が、百三十七体すべて違うことに気がつきます。

それぞれの家々で先祖代々お守りされてきた阿弥陀さまは、先祖代々お守りしてきた人々と共に過ごし、うれしいときも悲しいときも、幸せなときもそうでないときも、その家族を見守り続け、共に喜び悲しんで来られたのでしょうか。

だから、阿弥陀さまのお顔も、家々の歴史と同じように、一つ一つ違うのかもしれない。「我が家の阿弥陀さま」は、これからも私たちを見守ってください。

平成二十一年九月一日発行
浄土宗西山禅林寺派

常林院

月影



第30号

あいべつりく
愛別離苦

あい ひと
く 愛する人と

わか 別れなければならぬ苦しき

しやか 釋迦



悲しみをのりこえて

昔、お釈迦さまの時代に、クリシャー・ガウタミーという女性がいました。彼女には一人の男の子がいました。なかなか子どもに恵まれなかった彼女にとって、ようやくさずかった子どもだったので、とてもとてもかわいがっていました。

よちよち歩きを始めた頃、その男の子が突然死んでしまいました。ガウタミーは、子どもの死体をかかえて町を走り回り、狂ったように叫びます。

「どなたか、この子の生き返る薬をください！」

子どもの死体は腐りはじめ、臭いがしています。それでも彼女は死体を離しません。

「女よ、わたしがその薬をつくってあげよう。」

そう声をかけたのはお釈迦さまです。そしてお釈迦さまは、

「薬の原料となるカラシの種をもらって来なさい。ただし、これまで死者を一度も出したことのない家のカラシの種でないのだ。」と言われました。

ガウタミーは町中の家々を訪ねて回ります。

「お宅では死者を出したことがありますか？」

どの家も死者を出したことのある家ばかりです。

去年夫を亡くした家、おじいさんを亡くした家、ある家では子どもを亡くしたばかり、と涙ながらに話す人もいました。

家を訪ねるごとに、ガウタミーの狂気は少しずつしずまっていきます。

彼女はお釈迦さまのところへもどります。

「女よ、カラシの種はもらってきたか？」

「いいえ、もう薬はいりません。この子を茶毘(だび)にふしてやります。」

とガウタミーは答えました。

お経の話し何が書いてあるの？

浄土宗西山勤行式（赤本） 解説

三念仏

なむあみだぶつ

南無阿弥陀仏

なむあみだぶつ

南無阿弥陀仏

なむあみだぶつ

南無阿弥陀仏

（訳）阿弥陀仏に心からきえ帰依いたします。

阿弥陀仏に心からきえ帰依いたします。

阿弥陀仏に心からきえ帰依いたします。

南無とは「おまかせします」

南無阿弥陀仏の「南無」には、「心」という意味があり、阿弥陀さまに私のこの身この命を捧げ、すべておまかせいたします、という意味です。

この「おまかせいたします」を難しく言うと「帰依（きえ）いたします」になります。

阿弥陀さまに帰依するので、「南無」＋「阿弥陀仏」で「南無阿弥陀仏」となるのです。

したがって、拝む仏さまによって唱え方は変わります。観音菩薩を拝むときは「南無観世音菩薩」、お地藏さまを拝むときは「南無地藏大菩薩」と唱えます。

南無阿弥陀仏の「阿弥陀」は、「量（はか）り知れない（無量）」という意味をもつインド語「アミタ」に由来します。「阿弥陀仏」という仏さまは、量りしれないほどの寿命と、量り知れないほどのあたたかい救いの光をお持ちになった仏さまです。そこから、阿弥陀さまのことを「無量寿仏」「無量光仏」ともお呼びします。

「阿弥陀さまにすべておまかせいたします」という思いが、「南無阿弥陀仏」という言葉になって、お念仏となっていくのです。

仏事と作法

問)「春のお彼岸」と「秋のお彼岸」は何が違うのですか？

答) 一般に「お彼岸」とは「彼岸会」の仏事をいい、年二回執り行われます。彼岸会は、春分・秋分の日を中日として、その前後三日をあわせた七日間行われます。普通「お彼岸」といった場合は春のお彼岸のことをいい、秋のお彼岸は「秋彼岸」と呼び、区別をします。

「国民の祝日に関する法律」によれば、春分の日は「自然をたたえ、生物をいつくしむ」とされ、秋分の日は「祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ」と意味づけられています。

お彼岸

問)「彼岸の入り」というのは何のことですか？

答) 彼岸会の時期である七日間の最初の日を「彼岸の入り」と言います。そして、最後の日を「彼岸明け」または「結願(けちがん)」と呼びます。地域によって呼び方は様々です。

問) お彼岸はどういうふうに通ごせばいいのですか？

答) お墓参りをし、仏壇を掃除して、お菓子や果物等をお供えします。また、お寺で行われる彼岸会法要やお説教に参加します。

問) お彼岸にお供えする「おはぎ」と「ぼたもち」は違うのですか？

答) 「おはぎ」も「ぼたもち」

も同じものです。

春彼岸に供える「ぼたもち」は、春に咲く牡丹(ぼたん)にちなんで「ぼたもち」といい、秋彼岸に供える「おはぎ」は、秋に咲く萩(はぎ)にちなんで「おはぎ」といいます。

問)「彼岸花」はどうしてお彼岸の名をつけているのですか？

答) 九月中旬の秋彼岸の時期に花を咲かせ、秋の訪れを知らせる花であることが由来になっています。

また、彼岸花は有毒なため食すると死に至ることがあります。そこから彼岸(死)にいつてしまうからという説もあります。

別名「曼珠沙華(まんじゅしゃげ)」「地獄花」

「幽霊花」「死人花」。

